

山家悠紀夫『景気とはなんだろうか』岩波新書 2005 年

第 4 章 戦後日本の景気循環 (2)

問題提起

「1999 年から 2000 年にかけて順調に進行しているかに見えたこの景気拡張は短命であった」(P118,L2) とあるが、なぜこのような短い期間で終わってしまったのか。

選んだ理由

アメリカ経済失速の影響を受けたことが要因のひとつであるが、他の要因を考えてみることも重要であると思ったから。

A グループ

「構造改革」の思想により、企業は市場価値（株主からする評価）を高めようと、内部留保や配当などの増加を重視し従業員の賃上げを避けるようになった。その結果、家計部門の需要は低迷し、企業部門への波及もなくなっていき、「景気の拡張する力」（128 頁）が弱まってしまった。そのためアメリカ経済の失速という外部経済の変化の影響を強く受けるようになり、景気拡張は短命となってしまった。

B グループ

「構造改革」の思想が強まり、（企業が）内部留保や配当を増やしたため、従業員の所得が減ることになった。よって家計部門の需要が低迷し、またアメリカ経済の不況による輸出の減少も重なったため。

C グループ

市場競争重視の考え方を軸にした「構造改革」によって景気の自律的拡張のメカニズムが壊れ、またそれによって信頼の構造までもが壊れ、それが影響して家計部門の需要が低迷を抜け出せなかったから。

D グループ

「構造改革」の思想が流布されて、（企業が）賃金を上げることを避ける傾向になり、企業収益の増加が家計所得の増加に繋がらなくなった。結果、家計部門の需要が回復せず、景気拡張も短期間で終わってしまった。